

1日(祝)【修正会】

午前10時～11時

6日(火)【寺子屋シュシュ】

午前10時～12時

12日(祝・月)【御正忌報恩講】

午後1時半～3時

住職が勤めます

※法座前清掃はありません

20日(火)【仏教讃歌サロン】

午後2時～3時半

鏡割りしたお餅を  
いただきます

今年もよろしくお祈りします



次女あかり(高3) 住職(53) 坊守(50) 長女みのり(大4)

謹賀新年

令和八年

おてライフ

教安寺新聞  
(毎月発行)

令和8(2026)年

1月号

NO.35

好評! ご法座 お参りスタンプラリー



スタンプ  
1個

スタンプ1個から  
抽選で一名の方に  
記念品を差し上げます

皆勤賞

すべての法座にお参りされた  
皆勤の方に  
記念品を差し上げます

今からでも  
大丈夫!

今年度はあと2法座

1月

12日  
(祝・月)

御正忌報恩講  
住職

※スタンプラリーカードの日にちが間違っていました

3月

22日  
(日)

春彼岸法座  
竹本 霊 師  
抽選会

月のことば

正月は 冥土の旅の一里塚

めでたくもあり めでたくもなし 一休禅師

この言葉は、とんち話で有名な一休禅師が正月に頭蓋骨を持って街中を歩いたという逸話に由来する。かつては数え年で年齢を数えていたため、正月は家族や友人らと一つ年を重ねる節目を祝うものであった。しかし一休禅師は、年を重ねることは同時に「死に近づくこと」でもあるとして、あえて正月に世の無常を説いたのである。無常を知ること、命のはかなさを知ること。そして日々を大切に生きる者になることである。

ある終末期医療施設に携わる医師と僧侶が、患者さんに来世について恐れず次の段階へと向かってもらえるよう、しかも「天国」や「極楽浄土」といった宗教的語彙を用いずにどう表現したら良いか検討していた。「光の国があるよ」「星になるよ」などの意見が出たが、どれもしっくりこない。最後に僧侶が「私もいつか往くから待っていてください」と提案し、互いの命の有限性を示す表現として一応採用された。ところが実際に臨終の患者さんに伝えたところ、「どこで待っていればよいのですか」と問い返されたという。

終末期医療の研修会で聞いた話だが、重要な視点を含んでおり印象に残っている。末期を迎えた患者さんにとって「来世」は遠い未来の話ではなく、「今この時」の問題なのである。この局面で初めて場所を示されても、かえって迷いを深めてしまうのだろう。「いつか往く」ではなく、「必ず往く」のである。今まさに皆がいのちの局面を迎えているのであり、その行き先を考えるのに日を選ぶ必要はない。

「仏さまの話は若いうちに聞いた方がええ」と蓮如上人は常々仰っていた。いま聞かせていただく仏法こそ、心強い道しるべとなる。本年もお聴聞の年として始まった。めでたし、めでたし。



おてライフはご家族みなさまでお読みください



教安寺

浄土真宗本願寺派 尚法山 教安寺  
〒733-0851 広島市西区田方 2-20-1  
TEL (082) 507-3067 FAX (082) 507-3087  
URL <https://kyoanji.net>

